

メイカーの支援を通じて ものづくりの新時代を拓く

世界屈指のものづくり都市である深圳では今、ハードウェアにおけるスタートアップが 뜨기 뜨기와生きている。それを読み解くうえで重要な鍵のひとつとなるのが、「メイカー」と呼ばれる人びとの存在だ。

英語でMakerの意味は、大きな工場をもつ製造業の会社から個人でものづくりを楽しむ人まで幅広い。けれども、アメリカを発祥の地としてものづくりの民主化を体現する「メイカー・ムーブメント」は、後者を意味する。少人数による、必ずしも事業を目的とはしないものづくりを楽しむ人たちのことを、日本では「メーカー」ではなく「メイカー」と区別して表記するようになっていく。

それでも少しわかりにくいのは、そもそも「メーカー」と「メイカー」が同じで、区別したい存在だからだろう。世界中のメイカーたちにオープンソースの基板や部品を提供

し、さらには製品化のサポートやスタートアップの支援まで行うシード(Seed)は、深圳におけるこの分野を象徴する企業。彼らもまた、ひとり自宅でものづくりを夢見る「ドリーマー」から、10000人規模のスタートアップ企業、より大きな製造業まで区別せずに「メイカー」と呼ぶことで、新たな時代のものづくりを提案しているという。

●ものづくりを楽しむ若者たち ——x-factory

そんなシードが運営する会員制の産業IoTハードウェアイノベーションラボ、x-factoryは、若いメイカーたちの熱気であふれていた。ものづくり、とりわけIoTハードウェアに興味のある会員は最年少で13歳、最年長60歳で現在は約120人ほどという。彼らは、ここにある3Dプリンタやレーザーカッターなどを自由に使い、さまざまな部品や

基板づくりなどでアドバイスや協力を受けることもできる。

このラボを管理するヴァイオレット・スー(Violet Su)氏が見せてくれたのは、たとえば遠く離れた恋人同士が色やライトを使って交流するための不思議なシステムや、有名な化粧品メーカーの景品としてつくられたオモチャのヒップホップマシンのようなもの……。それらのクオリティはともかくとして、驚いたのは完成するまでのスピードだ。

「ハードウェア設計、ソフトウェア設計、アーティストなど5人のメイカーが集って化粧品メーカーと話し合いながらつくったこの仕事では、最初の企画立案から2万個の生産まで、たった41日間しかかかっていません」

メイカーたちのパワーはもちろん、深圳のハードウェア産業の底力を感じさせる話だ。そして、クライアント企業との橋渡しから部品の調達、資金の工面などで細かくサポートしてくれるx-factoryの存在があったからこそ、できた荒技でもあろう。

最も多いのは中国人だが、最近では日本をはじめ海外からの参加者も増えているという。彼らは互いに情報を交換しながら、ときにはコラボレーションを行いながら新しいものづくりに挑戦している。そして、優

れた商品やアイデアにはシードが資金や経営のアドバイスといった面でも助力を惜しまない。実際に、規模はまだ小さいながらもひじょうに多くの「メーカー」がここから起業という形で生まれ、活躍しはじめているのだ。

●「メイカー・ムーブメント」は 日本でも起きている ——高須正和氏「スイッチサイエンス」

日本でも、メイカーフェアとして毎年開催されているイベントには500組以上の出展者が参加し、2万人を超える来場者が集う。そこで見られるのは、さまざまな近未来的なデバイスだけでなく、電子部品の形をしたアクセサリなど、どちらかというと趣味的なイメージも強い。深圳でも、アジア最大級のメイカーフェアが開催されるようになってきた。ふたつのフェアの違いや、共通

項は何だろうか？ 世界のメイカーフェアにも詳しい深圳在住の高須正和氏に聞いた。

「2014年のメイカーフェアで初めて深圳を訪れました。深圳は日本のように趣味でものづくりをする人は、あまり多くないんです。シードのような、DIY文化のようなものを応援している企業もありますが、やはり起業をして仕事としてやりたい人が多いですね」

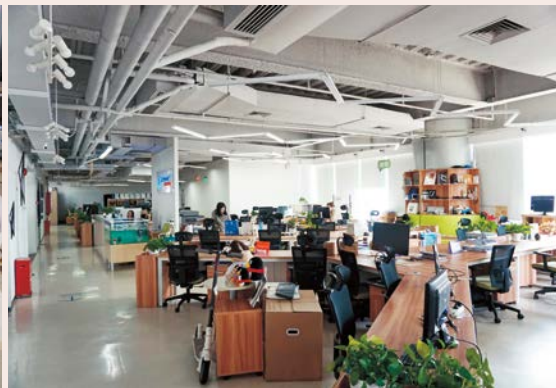
日本のメイカーたちが使う電子部品などを販売する株式会社スイッチサイエンスに勤める高須氏は、しかしメイカー・ムーブメントとビジネスが決して完全な別物ではないことを指摘する。

「シリコンバレーの有名な起業家のなかにも、もともととは趣味から始まったという人が多いですよね。その多くが、誰もやったことがないことを、自分がやりたいからやっていたわけです。私は日本の趣味や副業でものづくりをしているような人たちのために、必要な部品や製品を供給するために深圳で仕事をしているのですが、一方で深圳の人びとが仕事のつもりでつくっている変なモノもたくさんあるので、その面白さも感じています」

そして、現在はかつてのような大企業が数億、数十億円の予算をかけ

て新製品を生み出すやり方ばかりではなく、「それぞれの人が、自分の興味で」新しいものをつくっていくことが大切な時代になってきたのではないかと指摘する。「世界を変えるような大ヒットは、世に出た瞬間はすべてマイノリティです。そういうところに今、お金がまわっているのがシリコンバレーと深圳なのでしょう。興味深いことに、日本では有名企業の中堅どころといった優れた人材が現場を外されて管理職になり、副業規定を気にしながらこっそり趣味でものづくりを楽しんでいるため、かえって自分に正直な作品が見られます」

そんな日本のメイカーたちのなかでも、深圳に興味をもつ人びとが少しずつ増えてきている。「ニコ技深センコミュニティ・華強北オフィス」はそうした日本人が深圳を知り、深圳の人とともに活動するための活動を行う拠点であり、高須氏ほか数名が中心となってその流れを後押ししている。先に紹介したx-factoryなどでものづくりを行う日本人が増えてきたのも、そのためだ。ものづくりの楽しさとハングリー精神が同居するこの街で、近い将来に日本語の「メイカー」と「メーカー」が再びひとつになることも、決して夢物語ではないと感じられた。



右／ニコ技深センコミュニティ・華強北オフィスが入るフロア。
左／フロアに設置された3Dプリンタ。

右／お話を伺ったヴァイオレット・スー氏。
左／開放的な空間が印象深いシードのオフィス。

